

季節がめぐって、哈雨浜にも春がやってきたが、この頃になると、ソ連兵も撤兵し、代わりに中国兵が街の治安のためやってきたが、それもつかの間、蒋介石の兵と共産軍、八路軍とが、衝突を始めたとのこと。そして哈雨浜より南の、第二松花江の鉄橋が爆破されたとの情報が入ってくる。

終戦の一年目がやってきた。この頃になると、やっと日本にわれわれも送還されるとの明るいニュースが流れた。一人が一万二千円宛持参してよろしい。博多にいたら日本円壹千円を渡すとのことで、八月三十一日哈雨浜駅前に集合、無蓋車の人となったが、案の定、第二松花江まで来たら、汽車がそれ以上進まない。松花江南の駅まで徒歩と舟での渡河となりました。歩く距離は約四キロぐらいあったでしょうか、暑さと栄養失調のため、幼い児が息たえた。その親は、その場に穴を掘り、埋葬した光景も見た。後髪をひかれる思いであつたらうと思われる。日本に引き揚げる直前に、このように命をなくした日本人も、数多くいたことを明記し、これら人びとのご冥福を祈りたい。

## 命令の陸路帰国——虐待に命がけ

山梨県 石川 武

むごい民主連盟員の扱ひ

九月三十日（昭和二十一年）午前六時半、私は『日僑遣送安東第十七大隊通訳』という腕章を巻いて、駅前広場が集まった。六個中隊、二十四小隊、全市からの准難民千五百人は、重留大隊長を先頭に安東駅の保税倉庫に向かった。

銃剣ものものしい八路兵の廠戒のうちに、民主連盟員による嚴重な荷物の検査が行われた。禁制品や国弊を捜し、握り飯を割りパンをさいてまでして発見しようとする。八路軍票は奉天では使えないことがわかつている。邦人が物を売り、働いて作った血の出るような国弊を、下駄の鼻緒や水筒の吊り紐の中に縫い込んでおくと、同胞の身でありながら鬼畜のようにあばき出しては没収するのだった。婦女には婦人の連盟員が身体検査をして帯

などを解かせた。

「禁制品を持つてると帰国取り消しだぞ。」「途中、いくつも山坂を越えなければならん。どうせ捨てるのだから越冬する同胞のために残しておけ。」と、口やかましく言われた。帰国取り消し怖さに子供の物までも強制的に供出させられてリュック一つになった。

検査は約六時間で済んだが、携帯金国幣一人三千円の規定を守らなかった者、および、技能登録者ら数人が帰国取り消しになった。やっと帰国証明書を手に入れるころ、没収物資は山と積まれ、大車で何台も市政府に運ばれていった。

午後五時から民主連盟主催の送別演芸会が開かれた。劉日僑管理科長、中西民主連盟員のあいさつのおと、文化班の歌や踊りの演技があった。独唱の部では、かつて東炊子監獄で煙火巻きをしていた永井美奈子が『だれか故郷を思わざる』を歌った。夫は朝鮮で獄死し、わが身は留用されて他人（ヒト）の帰国を祝福しなければならぬ今の身の上。この歌に託す彼女の、祖国を見失うまいとするかのような心情がうかがわれて、そぞろ哀れをも

よおした。

冷え込む倉庫のセメント床の上に持參のゴザを敷いて、左右に子供を抱いて横になったが、これが安東十二年の最後の一夜かと思えば、感激いとど増して目はさえるばかりであった。

明くれば十月一日午前九時、十両編成の遺送列車は動きだした。全滿唯一の桜の名所鎮江山、宮々と作りあげた美しい街並、悠久なアリナレ（鴨緑江）の流れなど無情にも消えていく。さようなら、安東！

五龍脊で老古溝開拓団（内地からの移民）二百人が背負子（ジョイコ）一つのみすぼらしい格好で乗車した。

軍政府の甘言につられ今春以来耕作した粒粒辛苦の作物も、いよいよ収穫というときになると一指も触れてはならぬと言われ、とたんに飢餓線上に放り出された。絶命、猛運動の末、やっと今次の遺送に入れてもらったのだという。そうれみろ、民主連盟が安東で勧めた寛甸、桓仁の入植だってこんなものなんだと一同憤激した。

午後十時、漫漫的の列車もやっと連山関に到着、車中泊。ここでも民主連盟員が現れ、いくらかの物資供出が

強制された。

翌未明、車は動きだしたが七時半ごろ下馬塘駅の手前で降ろされた。ここから橋頭までの安奉線は戦鬨で線路や鉄橋が寸断されているから、山路を迂回して四日間の徒歩をしなければならぬという。千七百人が前線を突破しての大打進に前途の苦難が思いやられて気が重い。

幾日も山坂を歩いて

川を渡り急坂をよじ登ると山腹をぬって走る往年の警備道路に出た。各中隊ごとに隊旗を先頭に団結して進んでいく。老幼男女互いに手を引き励まし合いながら歩く。えんえんと連なる隊列を見ると、これぞ追われ行く民族の悲劇かなと胸がせまってきた。

動かぬ子供をリュックの上に負えば、おのれの足も進まず、休もうとすれば警備の八路軍に、「快快的」と追い立てられる。途中、小雨に濡れて病人が三人出た。部落で麻袋を求めて急造の担架を作り、人夫十二人を雇って担がせた。夕暮れに南墳（ナンフェヌ）の煤鉄公司社宅に入る。およそ十二キロを八時間余りかかった。社宅とは名ばかりで窓も取り壊されたあばら屋である。土民

の物売り声かしましく、八路軍票もここまでなど言って購買意欲をさそった。

翌三日は雨で一日滞在。長崎県の婦人が急に産気づいて女兒を産み落とした。予定より早かったとかで準備がなく、隊員中から布類を持ちより産衣とおむつを作る。休養して後統部隊に合流するように勧めたが、どうしても一緒に行くといって聞かない。やむなく担送することにした。ここには民主連盟派遣の診療所があって、安東満鉄病院の三善医師の顔も見え心強かった。

前線突破

十月四日、またしても民主連盟の例の巧言にのせられ、最後の所持品供出をしてから、七時半に出発。昨日と同じに八路兵が数人護衛についてくれた。いよいよ中央軍との交戦地区に入るといっているので、みんな顔に緊張の色がただよう。途中での部落でも土民が道をさえぎり、何かと物をねだってうるさい。びったり突きつけられた銃をよくよく見ると南部式訓練銃だったりするし、八路兵もいるので気を強くして一切受け付けずに進む。荷物を運搬させるといつてくるが、安心して任せられない。十一

時、谷川のほとりで昼食をとった時、リュックの上に干しておいた赤ん坊のスポンがすっと土民の中に消えた。油断もすきもあつたものではない。ここで八路兵と案内の民主連盟員は別れを告げて立ち去つたが便衣の八路が代わるのを見て、いっそう身がひきしまるのを覚えた。

辺りは故郷の御岳・昇仙峽に似た美しい秋景色だが、山は急で道は狭くごろ石に足をとられて隊列はなかなか進まない。あえぎあえぎ登る坂の途中で、担送してきた福岡県の老人が息をひきとつた。小休止して心ばかりの式をする。隊員中の一人が引導を渡して丘の上に葬つた。担架に乗ってまでも帰国を急いだ老人の願いも空しく満洲の山路の露と散ってしまった。

この時、ひそひそと相談していた担架の人夫らが、老人のお役御免になつた四人と一緒に、みんな帰りたいと言いだした。次の宿所までという約束じゃないかといつてもきかない。「辛苦大々の」とか、「これから先は戦闘地帯で危険だ。」とか言つて動こうともしない。一架四人でその代二千四百円、これまでの四架分は相当な額である。いま交替すれば新たにその分がかさんでくる。ま

た、この人里離れた山中で、交替しようにも人はいないではないか。明らかに足元を見ての駆け引きである。酒手はずめばことは解決するだろうが、さもしい根性に憤然として、「随弥的便（勝手にしろ）、回去罷（帰れ）。」と怒鳴り、隊員中の若者に呼びかけ奉仕をせよらうことにした。

最後の難関五支里（二、八キロ）の峠にかかった。胸をつく急坂を一步一步、若者は老人を支え、親は泣く子をしっかりと励まし、やっと越えたと王家堡（ワンジャブン）という部落に出た。これがうわさに聞いた八路勢力の最前線である。とたんにバラバラと土民とも便衣隊ともつかぬ黒衣の数人が現れ、手に手に拳銃や小銃を構えて道をふさいだ。さっきまで道案内をしてくれた八路の者はと搜したが、どこに消えたが皆目見えない。突つきるには相手の道具立てがものしい。

行進を止めて相手になると、「軍隊用のシャツや毛布、時計などを売れ。」と言ふ。「見たとおりの難民だ。出す物はない。」と言ふと、「出せないことはない。出すまでは通過させない。」と武器を胸元に押し付けての脅迫で

ある。押し問答を続けたが、事件でも起きてはと中隊長を集めて相談した。結局、隊員の犠牲的供出を隊で買い上げ、時計五個万年筆三本と軍隊用品など二十五点ほど渡して落着した。むろん彼らからの代価は捨て値で、しかも八路票であった。

この交渉で意外に時間をくった。すでに日は西に傾きかけている。隊員一同一刻も早く八路地区を出たいとあせるけれど、彼らに止められた。「この先は危険だ。無法地帯だから連絡員がなくては一步たりとも前進できない。どうしても一泊するんだ。」と聞いて聞かない。はては道に立ちはだかつて行く手をさえぎる始末である。彼らにしてやられた。初めから計画的に宿泊させる意図で時を稼いでいたのだ。いまましいが老幼病弱者のことを思えば野宿もできないので、やむをえずこの部落で泊まることにした。

だが、上下二部落を合わせてもたった十三戸の農家である。千七百人をどう割り当てるか。中隊長の裁量で婦女・老幼者を土間・納屋・物置までぎゅうぎゅう詰め込み、男子は庭先に寝かせたが朝起きたとき霜をかぶって

いた。宿料一人三十円というが、屋外の者は五円にさせた。高粱飯一碗十五円。こんなふうに、これまで通過の十六大隊からせしめたのであったら大した発財（ファーツァイ・もうけ）であつたらう。

夜、いつの間にか便衣八路が数人警戒に立った。そして彼らは、ひもじい思いをしているわれわれの面前で白乾児（バイカル）酒をあまり猪肉を食べた。部落民の持て成しである。日本難民から絞り取った悪銭も、末はどう回ってゆくやら分かったものではない。トリックにかかっているのはわれわれだ。下の部落ではリュックが一つとられ、強情に品物を売れと言われた家二軒あつたという。

#### 接壤地帯

十月五日八時、国共両軍の接点に足を踏み入れた。連絡員と称してついて来た二人から工作費として四千元を要求された。中央軍の秘密組織にわたりをつけて、穩便に通してもらうためだという。金を握ると二人は煙のように消え失せた。連絡したやら工作したのやら分からないうが、中間の竜王廟（ロンワンミャオ）の部落を何事も

なく通過できたことなど、後で他の部隊の話を書いてみて、まんざら無駄でもなかったんだと自ら慰めた。

左右の丘にトーチカの見える射程区域内を進む。辺りのはのかな田園風景である。十時に劉家堡（リウチアブ）に着いた。みんな死線を突破した感じではっとする。さっそく区長・屯長のところへあいさつに行くと、区長は大入ひげの六十歳前後、阿片が切れたらしく物うい目を開いて聞いている。彼らの言うとおりに到着表を中央軍の営部（大隊本部）に提出してもらい、その指示を仰いだ。間もなく指示があって、「目下、前日到着の安東十六大隊の検査中であるから本日点検は難しがる。明日にせよ。」とのことであった。中央軍管下に入った安心から、そのまま一泊したが、実はこれら全部が区長・屯長の策略であったとは気がつかなかった。

劉家堡は戸数二十戸、豊かな農村のたまたまである。中隊長以上を集めて壮年の屯長が一場の訓示をたれたが、「満州国」を「新中国」に、「王道楽土」を「興復」とに入れかえただけの聞き慣れた名演説には、吹き出しそうなのをこらえるのに困った。「密言威刀」を地でいって、

だんだん刀の先がちらついてきた。

「天然痘がいるからよそへ移りたい。」と仲間が言ってきたので、割り当てのその家へ行ってみると、なるほど真正銘のがある。よそへ移らせると、侮辱するにもほどがあるよねじこんで来た。すったもんだでとうとう一千元とられた。区長と屯長には工作費としてそれぞれ一万円、三千円渡しておいたが、区長にはなお毛布・シャツ・時計・指輪などの品物を検査官将校へ提出せよという。泣く泣く隊員中から要求物資の幾割かを買ひ上げて差し出した。

営部への工作に区長の息子が行くので、だれかついて来いという。結局私が行くことになったが、息子はなかなか出かかない。物陰に私をさし兼ねいた。「担当将校に工作しなければ駄目だ。ついては、もう一つ時計を出せ。」という。私の大きな懐中時計を見せると、腕時計でなければと渋るので、大事の前の小事、やっと隊員のドルミーを買ひ上げてやった。

奇怪なのはこの青年、六支里（三、五キロ）しかないというのに、二時間も森や原っぱを引き回した挙げ句の

果て、「今日行っても会えないから明日にしよう。」と言って引き返そうとした。へ一杯食わされたか、この若僧め」と、憤りが先にたち、「どうしても行くんだ。行かなければ私の責任が果たせぬ。」と詰め寄ると、彼は威丈高になって、「区長（オヤジ）のいうとおりにしないとお通できないぞ。」とおどす。怒り心頭に発し、この青二才めがと腕が鳴ったが、隊員のことを考え歯をくいしばってこらえた。帰ってから隊長以下の案じていた顔を見て、我慢してよかったと思った。

一人の不用意な言動が、全体の不幸を招いた例は嫌というほど知らされているからだ。置いていった荷物から洋傘二本が消えていた。当地は米その他の物資は豊富で、一同脱出の安心感からゆっくり休養の一夜をとれたらしいが、私は昼のむしゃくしゃした気分に加えて、隣室の区長の阿片を吸う音が耳に障ってなかなか寝つかれなかった。

十月七日七時半、全員集結、スパイ潜入を警戒して人員点呼を厳重にし、名簿と照合してから出発した。大車八台を雇い、病人と老人子供の荷物を載せた。自身が営

部に周旋するといっていた区長も屯長も、あの若僧までも姿を見せない。工作などとペテンにかけられた悔しさに地団太踏んだがあの祭り。

河原の検査場に着くと、中央軍将兵三十人が現れた。こちらは小隊長以上が整列し、大隊長重留が感謝の辞を述べると、先任将校は、「長い間ご苦労でした。わが中央軍が迎えた以上、絶対に心配ない。この検査も八路兵の潜入と武器の隠匿を調べるのが目的だから安心せよ。」ときわめて友好的なあいさつをした。

安東民主連盟の宣伝でおどかされていた一同、それでもどんなことになるかとびくびくしていたが、検査はたった一時間半ぐらいで終わった。連盟言うところの青壮年の強制徴募もなければ、婦女子の強要もなかった。ただ、将校らの物資買い上げだけは免れなかった。開けられたリュックから背広二着、オーバー三着、毛布六枚など、十数点が指摘され買い取られた。まるでお気に召す物と広げて見せたようなものだ。こちらの言い値で払ってくれたが、隊員にとっては山坂幾千里、苦勞して持ってきた愛惜の財産で、金には代えられない品物だ。これが

最後の供出とはなったけれど、僅かばかりの荷物がいよいよ軽くなり、身ひとつになってしまった感じである。

安奉線橋頭駅への九キロの道は平らで、駅前には宮原の日僑善後連絡所から日中両国人の遺送委員数人が来ていて、臨時列車を用意し待っていてくれた。懇切なねぎらいのことばに、一同ただただ地獄で仏の思いであった。安東からの陸路引き揚げは、国共戦闘の激化した十月初旬第十一大隊をもって中止されあとしばらく海路によつたが、残留同胞の苦難はひどかった。

## 同じ船団中の一帆船に乗る

東京都 岩崎 重夫

### 安東市の事情

初めに安東市の事情について書いておきたい。

鮮満を境する鴨緑江の下流にある町が安東市（いま丹東市）。鉄橋により対岸の新義州を経て列車は釜山まで通じ、海を渡れば日本の下関市である（関釜連絡船が

あり）。

だから、敗戦の前後には一日も早く内地に引き揚げたいと奥地から大勢が目指した。目的どおり帰国できたのは初期の軍閥係ら一部特殊家族だけで、多くの避難民たちは三十八度線により北側に止められたり（理由が認められ満州に戻されたものもある）、また、鴨緑江を日本人は越えられなくなっておびただしい数の邦人が安東に停留雑居した。停留雑居したとは厳冬に向かい在住邦人家屋の空き部屋に難民が分宿、あるいは用心棒的に受け入れられ、さらに後で明け渡しを求められる家が続いたので複雑さを増して一年あまり過ぎた意味をいう。

まれに避難民中で大金を隠し持った特別な立場の者がいたようだし、また、古くからの在住者は財産を持ち、それ相当の準備もしていただろうけれど、長びく無職（特殊、あるいは技能者は別として商業者も経営を離れ）生活で蓄えも乏しくなり嫌な事件が幾つもあって、帰国にはやる心情は押さええようがなくなっていた。

翌年五月に入って、奉天ではコロ島港経由での帰国が始まったと伝わると、ひそかに六月には陸路奉天向け脱